

高山寺の開祖・明恵について

高山寺の開祖で僧侶の明恵(1173~1232 年)の影響は、境内をはるかに越えて広がっていった。仏教思想への新たなアプローチ、日本における茶の栽培の普及、戦乱での未亡人への支援、そして今なお幅広い関心を集めている夢記など、さまざまな業績を残している。

明恵の遺産は、1206 年に天皇の命を受けて建立した高山寺に見ることができる。高山寺では、訪問者は今日もなお業績が生き続けている 13 世紀の僧侶の人生を振り返ることができる。

明恵の多様な信念

明恵は 8 歳で両親を亡くし、その後まもなく現在の高山寺の近くにある神護寺で僧侶に向けての修行を始めた。仏眼仏母(すべての仏の母と考えられる菩薩)と釈迦如来(歴史的な仏で仏教の教祖)をそれぞれ母親像、父親像とするようになった。明恵の生涯における彼らの特別な重要性は、彼の仏教修行に対する傾倒をより強めた。彼は後に華嚴宗(中国語：Huayan; Flower Garland)の最も重要な寺院である奈良の東大寺で修行をした。

明恵は生涯を通して密教的な真言宗と華嚴宗の修行を続けた。彼はこれらの伝統を彼自身の深遠な信念に結びつけ、それは以前は不明瞭だった光明真言も強調した。彼の独特な教えは、日本における華嚴宗の普及に多く貢献している。

明恵の教えは、当時仏教と土着の神道の神々崇拝との間で盛んになった習合に従ったものであった。二つの伝統の密接な関係は明治維新後の 1868 年にそれらの分離令が出されるまで比較的広まっていた。明恵は特に奈良の春日大社に祀られている四神を合わせた春日大明神を奉った。彼の信仰はとても厚かったため、春日大明神は彼が念願の仏教の発祥の地・インド巡礼をすることを思いとどまらせることができたという。春日大明神は現在も春日明神神社の高山寺境内に祀られている。

耳の一部を切り落とす：献身の行為

明恵は何年もかけて、仏教の教えに対する献身を示す相応しい方法を見出そうとした。24 歳の時、母親像とみなした菩薩である仏眼仏母の像の前にひざまずいて片耳の一部を切り落とすことにした。彼の端正な容姿をこのように醜くすることは、彼が現世の欲望からさらに遠ざかるための方法であった。

茶文化の種

明恵は中国留学から帰国した有力な禅師・栄西(1141~1215 年)から茶の種を授かった。明恵は高山寺近くの畑に種を植え、日本における茶の栽培の発展に貢献した。ノウハウは高山寺から南東に約 30 キロ離れた宇治に広がり、宇治は日本有数の茶の産地となった。

日本各地の茶の生産者は、明恵の日本における茶の伝統に対する先駆的な貢献を称え、高山寺で敬意を表し続けている。現在も高山寺には小さな茶畑が耕作されており、毎年 5 月には初摘みの新茶が収穫される。

女性の尊重

明恵は困窮している人々を深くいたわった。彼は、特に苦しんでいる女性の窮状を心配し、多くの人々が彼の門下生や支持者になった。

京都の朝廷軍が反乱を起こして鎌倉幕府軍に敗れ、多くの血が流れた、1221 年の承久の乱の後、多くの未亡人が彼の支援を求めるようになった。彼は彼女らを引き取って仏教を教え、最終的に善妙寺という尼寺を建てた。

善妙寺の名は、僧侶を守護するために龍に姿を変えたという中国の伝説の女性・善明(中国語：Shanmiao)に因む。明恵は善妙の精神をもって、女性を支援した。

芸術、動物、自然

明恵は芸術を愛し、高山寺では偉大な芸術家や知識人を集めた。彼が醸成した豊かな環境は、高山寺に伝わる多くの宝物の中に生き続けている。最も有名なのは、人間のように振舞う動物を描いた絵巻物のコレクション、鳥獣人物戯画である。

明恵は自然界をこよなく愛した。神護寺にいた幼少期から、彼は京都の山々を背景に外での瞑想を楽しんだ。ある肖像画には、野生動物に囲まれた二股に分かれた木で瞑想している姿が描かれている。特に犬への親しみは、彼が大切にしていたといわれる子犬の木彫りに表れている。

豊富な夢記

ここ数十年のうち、明恵は念入りに綴られた夢記により日本の仏教の世界以外でも広く知られるようになった。

明恵は約 40 年に及び夢の記録を残し、夢は彼の教えに大きな影響を与えた。この夢記は、マインドフルネス、自然保護、個人の充実感を重視しており、宗教学者にとっても世俗学者にとっても貴重な資料となっており、世界中の人々の関心を集めている。